

あいち農産物生産流通レポート

2025年7月号

	ページ
◎ マンスリーレポート	
・「いいともあいち運動」SNSにおける効率的な情報発信について (食育消費流通課)	1
◎ 地域トピックス	
・トマト・ミニトマト産地における高温対策の取組 (東三河農林水産事務所)	2
◎ 東京レポート	
・東京都中央卸売市場における2024年産の愛知県産農産物の動向 (東京事務所)	3
・「物流の2024年問題」に関する講演 ～物流改革は進んだのか？～ (東京事務所)	5
・「フューネラルビジネスフェア2025」が開催されました (東京事務所)	6
◎ 東京都中央卸売市場における7月の主要な愛知産青果物の動向 (東京事務所)	8
◎ 花 き	
・切花・鉢花の7月の見通し(県内市場) (食育消費流通課)	12

内容についての問合せ先

愛知県農業水産局農政部食育消費流通課

(052)-954-6434

愛知県東京事務所行政課農産物プロモーショングループ

(03)-5492-5400

「いいともあいち運動」 SNSにおける効率的な情報発信について

食育消費流通課

「いいともあいち運動」は、愛知県の農林水産業の振興や農山漁村の活性化を通じて県民全体の暮らしの向上を図るため、県民の方々に「愛知県農林水産業の応援団」になってもらい、消費者と生産者が一緒になって県の農林水産業を支えていこうという「運動」です。また、県民の方々に県産農林水産物をもっと食べていただきたいという、「愛知県版地産地消の取組」でもあります。

県では、「いいともあいち運動」への理解促進や地産地消の実践を目的として、「いいともあいち運動」 SNS (Facebook、Instagram、X(旧 Twitter)、YouTube) により、県産農林水産物や農林水産業に係る体験等の情報発信を行っています。

より効果的かつ効率的に情報を発信するため、生成 AI ツール等を活用した取組を行ったので、概要を紹介します。

1 SNS運用における課題

SNS を効果的に運用するためには、フォロワー数を増やして多くの人に情報が共有できるよう、定期的かつ魅力的な投稿が必要です。記事の作成には時間を要するほか、担当者が変わる度に記事の読みやすさや投稿頻度が変わり、情報の質の不安定さから受け取る側の継続的な閲覧につながりにくいという課題がありました。

2 取組内容及び結果

SNS 記事作成の効率化を図るため、2024 年度に生成 AI ツール (GaiXer) の活用を開始しました。イベントや店舗に関する情報源、文章量、文章の体裁等に関する指示内容のテンプレートを作成し、作成したい情報を生成 AI に入力することで、記事を作成する仕組みを構築しました。

さらに、記事作成のポイントをまとめた SNS 運用マニュアルを作成することで情報の均一化を図りました。また、記事の内容を反映した、投稿に最適な画像へと簡易に編集できるよう、PowerPoint でひな型を作成しました。

これらの取組の結果、記事作成の作業時間が 20 分/件から 10 分/件に短縮することができました。また、Instagram では、フォロワー数は対前年比 158%、延べリーチ数は同 186% となり、X では、フォロワー数は同 136%、延べリーチ数は同 145% となり、より多くの人に情報を届けることができるようになりました。

3 今後の展開

今後は、いいともあいちネットワークを活用し、関係団体等の SNS の投稿を互いに情報共有 (リポスト等) するなどにより、連携を強化して、より効果的・効率的な情報発信に努めていきたいと思えます。

「いいともあいち運動」 SNS アカウント名



Facebook : いいともあいち運動





Instagram : @iitomoaichiundo



X(旧 Twitter) : @iitomoaichiundo

トマト・ミニトマト産地における高温対策の取組

東三河農林水産事務所

令和5年度に創設された「高温対策栽培体系への転換支援事業」に、県内で唯一、豊橋市のトマト・ミニトマト生産者の有志10名が取り組み、高温耐性品種の導入に向けた実証を行いました。

1 事業実施の背景及び目的

近年の記録的な猛暑により、農作物の品質低下や収量減少となるなど、農業経営に大きな影響を及ぼしています。当地域のトマト・ミニトマトにおいても、夏季の高温障害により着果不良や裂果が多発し、年内の収量が安定しないという問題を抱えています。そのため、高温条件下でも安定した収量を確保できる品種の導入が喫緊の課題となっています。

このような状況の中、JA豊橋トマト部会及びミニトマト部会では、生産者の有志10名（トマト4名、ミニトマト6名）が高温耐性品種の導入に向けた実証を行いました。

2 取組及び結果

<取組>

トマト3品種、ミニトマト1品種の新しい高温耐性品種について、それぞれの慣行品種と比較実証しました。調査ほ場では7月上旬～8月下旬に定植し、9月から収穫が始まりました。調査は、着果率、収穫量、秀品率、規格外量などの項目について、9～12月にかけて行いました。また、消費者及び市場関係者を対象に、慣行品種も含めた食味評価も実施しました。

<結果>

ミニトマトは、高温耐性品種が慣行品種と比較して概ね良好で、産地の奨励品種に位置づけられることになりました。一方、トマトでは、1品種は着果率が不良で調査終了となり、残り2品種で継続調査が必要との結論となり、令和7年度に産地の自主的な調査として実施されることとなりました。

また、実証結果をもとに「高温耐性品種栽培マニュアル」が作成され、JA豊橋トマト部会、同ミニトマト部会で実証結果を踏まえた栽培管理の留意点が説明されました。

3 今後

高温耐性品種の普及だけでなく、遮光、換気、ミストなど他の高温対策技術を組み合わせ、高温対策栽培体系への転換を進めていきます。また、本事業で作成された栽培マニュアルは、今後も新たな知見を追記して随時更新・活用し、令和8年度にトマト、ミニトマトそれぞれで、高温耐性品種の作付が1ha以上拡大することを目標として、普及推進していきます。



生産者有志による調査

東京都中央卸売市場における 2024 年産の愛知県産農産物の動向

東京事務所行政課農産物プロモーショングループ

2024 年産（令和 6 年 1 月から同年 12 月まで）の東京都中央卸売市場（9 市場）における本県産農産物の総取扱額は 335 億円（シェア 4.9%）で 47 都道府県の中で第 6 位でした。

なお、その内訳は野菜が 193 億円（前年対比 106.4%）、果実が 18 億円（前年対比 89.3%）、花きが 124 億円（前年対比 97.1%）となりました。

1 野菜の動向

東京都中央卸売市場における野菜の総取扱額は 3,934 億円で、前年をかなり上回りました（+6.9%、255 億円増）。

本県産について、キャベツは、2 月まで生育は前進傾向でしたが、その後低温の影響により生育が停滞し、入荷が少なく、4 月～5 月は高値となりました。11 月以降は夏期高温の影響により入荷不安定で高値となり、取扱額は前年を大幅に上回りました。トマトは、夏期高温の影響により着果不良や小玉傾向となり、10 月～12 月は入荷量が少なく高値となりましたが、前年の価格が高騰していたことから、今年は前年より下回っています。ブロッコリーは、厳寒期から春にかけて生育前進傾向で入荷が多く、安値となりました。10 月以降は、育苗期や定植時の高温による生育不良、9 月の長雨による病害の発生、12 月の低温と干ばつにより、例年よりも少ない入荷量となり、12 月の単価は前年を大幅に上回りましたが、取扱額は前年をやや下回りました（表 1）。

表 1 東京都中央卸売市場における本県産主要品目の取扱額（野菜）

（単位：千円）

品目	2024 年	前年対比	順位(シェア)*	上位産地 (数字は全国順位)
野菜合計	19,291,679	106.4%	6 位 (4.9%)	①茨城、②千葉、③北海道
キャベツ	5,342,263	125.5%	1 位 (25.5%)	②群馬、③千葉
おおば	3,511,905	110.9%	1 位 (84.9%)	②茨城、③大分
トマト	2,663,912	93.5%	3 位 (9.2%)	①熊本、②栃木
ミニトマト	2,143,513	91.4%	3 位 (13.2%)	①熊本、②北海道
ブロッコリー	1,049,988	95.3%	7 位 (6.4%)	①北海道、②香川、③熊本

*順位は全国順位。シェアは外国産を含めて算出。

2 果実の動向

東京都中央卸売市場における果実の総取扱額は 2,018 億円で、前年並となりました（+1.7%、34 億円増）。

本県産について、いちじくは、ハウスと露地ともに 7 月下旬までは生育が順調に推移しました。その後、露地は夏期の高温、干ばつの影響で上段の着果数の減少や、小玉傾向となり、取扱額は夏期高温の影響を受けた前年をかなり下回りました。かきは、8 月から収穫期にかけての高温による日焼け果の発生や、カメムシによる吸汁被害が影響し

て入荷量が減少し、取扱額は夏期高温の影響を受けて入荷量を減らした前年並となりました（表2）。

表2 東京都中央卸売市場における本県産主要品目の取扱額（果実）

（単位：千円）

品目	2024年	前年対比	順位(シェア)*	国内上位産地 (数字は全国順位)
果実合計	1,838,623	89.3%	20位 (0.9%)	①栃木、②青森、③山梨
いちじく類	387,094	87.6%	1位 (43.9%)	②和歌山、③千葉
みかん類	449,468	85.9%	7位 (1.5%)	①愛媛、②静岡、③和歌山
かき類	517,771	101.3%	5位 (7.2%)	①和歌山、②奈良、③福岡
メロン類	96,134	96.8%	10位 (0.9%)	①茨城、②静岡、③熊本
いちご類	71,571	52.0%	16位 (0.2%)	①栃木、②福岡、③茨城

*順位は全国順位。シェアは外国産を含めて算出。

3 花きの動向

東京都中央卸売市場における花きの総取扱額は886億円で、前年をわずかに下回りました（△2.2%、20億円減）。

本県産について、菊類（輪菊、スプレー菊等）は、年間を通して生育は概ね順調に推移しました。夏期の高温により一部産地では生育遅れや、茎が短めとなりましたが、取扱額は前年並となりました。ばらは、夏期の高温により生産量が減少し、下位等級割合が増加したこともあり、取扱額は前年をやや下回りました（表3）。

小売店では、猛暑で客足が店舗から遠のいた影響で買い控えが見られたものの、またインバウンドによるホテル需要で装飾の引き合いが強くなりました。

表3 東京都中央卸売市場における本県産主要品目の取扱額（花き）

（単位：千円）

品目	2024年	前年対比	順位(シェア)*	国内上位産地 (数字は全国順位)
花き合計	12,358,919	97.1%	1位 (13.9%)	②千葉、③埼玉
切り花計	9,540,481	98.0%	1位 (15.4%)	②千葉、③長野
菊類	6,361,924	99.6%	1位 (40.8%)	②沖縄、③栃木
ばら類	1,017,072	94.8%	1位 (16.8%)	②静岡、③山形
カーネーション類	359,757	103.0%	5位 (5.7%)	①長野、②千葉
観葉植物	1,320,227	93.8%	1位 (33.0%)	②鹿児島、③沖縄
鉢花	487,858	92.0%	2位 (12.5%)	①埼玉、③千葉
らん鉢	306,110	99.0%	5位 (7.9%)	①千葉、②埼玉、③山梨

*順位は全国順位。シェアは外国産を含めて算出。

「物流の2024年問題」に関する講演 ～物流改革は進んだのか？～

東京事務所行政課農産物プロモーショングループ

運送ドライバーの業務をデジタルの力で支援する製品・サービスに特化した展示会「運輸安全・物流DX EXPO」（主催：株式会社リックテレコム）が2025年5月28日（水）～30日（金）に東京ビッグサイト（東京都江東区）で開催されました。取材した30日（金）は「物流改革は進んだのか。物流が抱える課題と今後の方向性。」（講師：流通経済大学 流通情報学部教授 矢野裕児氏）の講演がありましたので、その概要を紹介します。

1 「物流の2024年問題」の影響について

「物流の2024年問題」から約1年が経過した。2024年度は輸送能力（営業用トラックの輸送トン数）がコロナ前の2019年度と比較して約4.0億トン不足するという試算であった。しかし、2024年度の実績（推計値）は、2019年度と比較すると輸送量は約3.0億トン減少し、積載効率の向上により約2.5億トン増えたため、輸送能力の不足はみられず、物流の大きな停滞は発生しなかった。

トラックドライバーの1運行当たりの平均拘束時間は、2024年度は2020年度と比較して運転時間は40分短くなったが、荷待ち時間、荷役時間は変わらなかった。運転時間が短くなった要因は、長距離輸送の減少、高速道路利用率の増加等であった。



流通経済大学の矢野教授の講演

2 「物流の2024年問題」の解決の鍵は、物流DXの推進

物流業務においても、デジタル技術の活用（物流DX）が進んでいる。物流DXが一層進むことにより、業務の「見える化」（数値等の客観的なデータによる可視化）や情報共有による企業内の部門間連携・企業間の連携が図られ、物流業務の効率化や最適化が大きく進展することが期待できる。

物流DX推進には、前提条件としてハード面（パレットや輸送箱等のサイズの標準化等）とソフト面（伝票、バーコード、データ等の標準化）の双方での標準化が必要である。標準化により「見える化」が可能となり、ロジスティクス（logistics: 物流管理）をデータドリブン（Data Driven: 収集したデータに基づき意思決定をする手法）に転換することが可能となる。

当グループが常駐する大田市場では、「物流の2024年問題」に先立ち、トラック荷下ろし予約システムを2018年から導入しています。また、青果卸売会社の共同荷受体制が構築され、混載便の一括荷下ろしにより、並び直しによる荷待ち時間の削減や荷受け側が連携して商品を共同管理することで効率化も図られています。国が標準化を進めている11型パレット（JIS規格による1.1m×1.1mのパレット）についても、着実に導入が進んでいます。その結果、従来は2～3時間あった荷待ち時間が、現在では平均1時間以内となっています。

物流の課題の多くは先送りされているようですが、一部の業界団体や企業で改革が進んでいることは確かであり、今後、物流改革は着実に進んでいくものと思われま

「フューネラルビジネスフェア 2025」が開催されました

東京事務所行政課農産物プロモーショングループ

2025年6月4日（水）から5日（木）にかけて、横浜市西区にあるパシフィコ横浜で「フューネラルビジネスフェア 2025」（主催：総合ユニコム株式会社）が開催されました。花きの国内消費のうち葬儀向けは、業務用需要の69.3%（推計）（※）を占めています。

「フューネラル（英語で「葬式」を意味する）フラワー」に分類された展示ブースには、トレンドの葬儀用生花や祭壇を提案する様々な展示がありましたので紹介します。

※「花きの現状について」令和7年6月 農林水産省農産局

1 「フューネラルビジネスフェア 2025」の概要

当フェアでは葬祭サービスとライフエンディングをサポートする、葬祭事業者等を対象とした総合展示会及びシンポジウムが開催され、28回目となる今回は、147社が出展しました。会場には輪菊を使用した祭壇だけではなく、バラやアジサイ、カーネーションなど、様々な洋花を使った個性的な祭壇の展示コーナーや、生花祭壇設営の講習会が開催されました。

2 葬儀用祭壇の変化

これまでの祭壇は、輪菊を基調として多くの生花が装飾に使われていました。展示会では、家族葬用にコンパクトな祭壇や、造花と生花を使うハイブリッドタイプの祭壇、大型のデジタルサイネージを取り入れた祭壇など、様々なタイプの祭壇が紹介されていました。現代の多様な消費者ニーズを細かに捉えながら、葬儀用祭壇も多様化しています。



ハイブリッドタイプの祭壇



大型デジタルサイネージ祭壇

3 輸入される多様な葬儀用花き

切り花胡蝶蘭の生産・輸出会社「青島天美花卉有限公司」は、中国の青島市に大規模な生産拠点を持つ胡蝶蘭専門の会社です。現地から日本へは3日

で到着し、月に4～5万本が日本へ出荷されています。葬儀用の切り花胡蝶蘭は、花の大きさを12～13cmの規格に定めて出荷しています。



「青島天美花卉有限公司」出展ブースの様子

株式会社ディーマーケットは、国内外に切り花の契約産地を持つ総合商社です。カーネーションやアルストロメリアはコロンビア、バラやユリはエクアドルから仕入れています。海外産地では年間を通じた安定気候や大きな日寒暖差は、高品質な花の安定供給を実現しています。展示されていた輪菊、スプレーマムの国内産地には、本県産（田原産）もありました。



「株式会社ディーマーケット」出展ブースの様子

今回の取材を通じて、葬儀で使用する花「フューネラルフラワー」は、これまで輪菊が主に祭壇で使われてきましたが、今後はあらゆる種類の切り花が葬儀用として用いられる可能性を秘め、その選択肢は多様なものになっていると感じました。



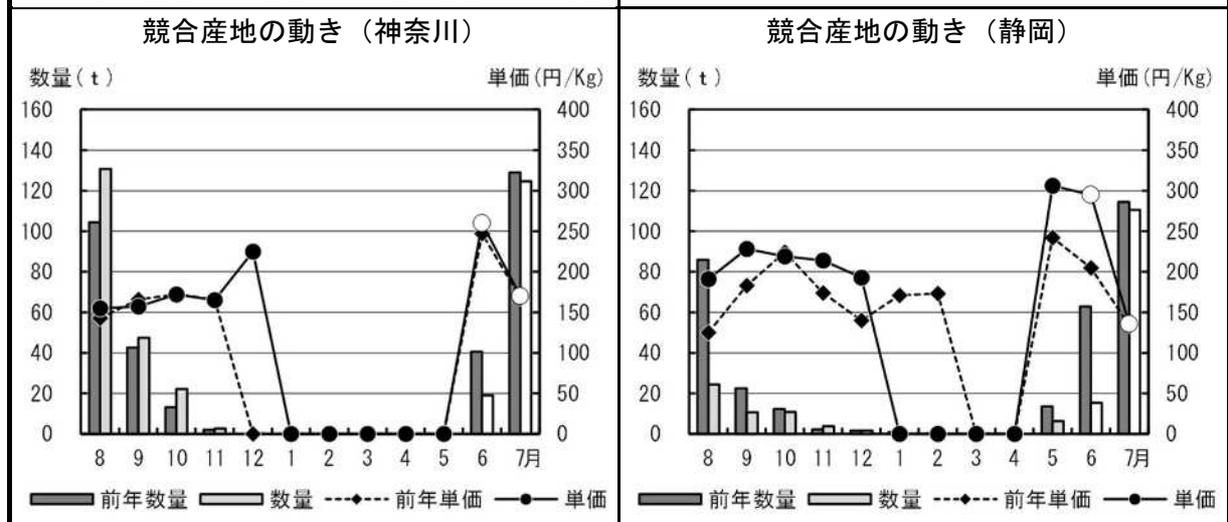
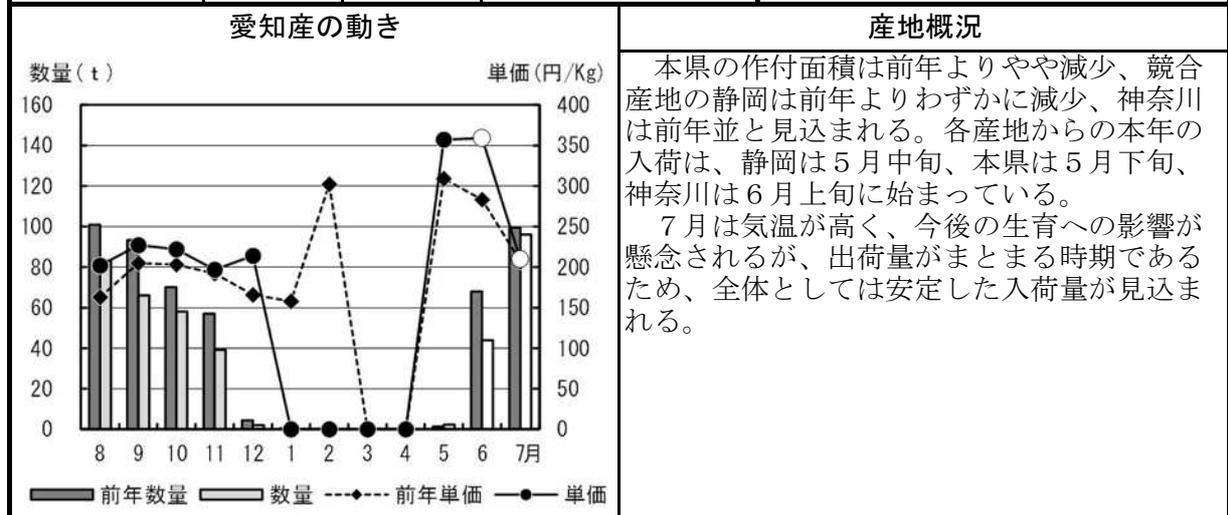
バラやアジサイを使った生花祭壇

東京都中央卸売市場における7月の主要な愛知産青果物の動向

1 7月の見通し

品目名 とうがん

実績等		区分	入荷量	卸売価格	前年上位3産地(%)	市場からの提言等
実績	2020年		486	126	神奈川 31%	愛知産は、品質面では特に良いものから並以上まで産地により差がみられるが、全体的には問題がないレベルである。 例年6月下旬から7月末にかけて各産地の入荷ピークが重なり単価が下がるため、難しいとは思いますが、なるべく山谷の少ない出荷体制を検討してもらいたい。
	2021年		529	126	静岡 28%	
	2022年		582	140	愛知 24%	
	2023年		471	165		
	2024年		414	158		
5カ年平均			496	143		
2025年見通し			400	160		



2 入荷量・価格の動き

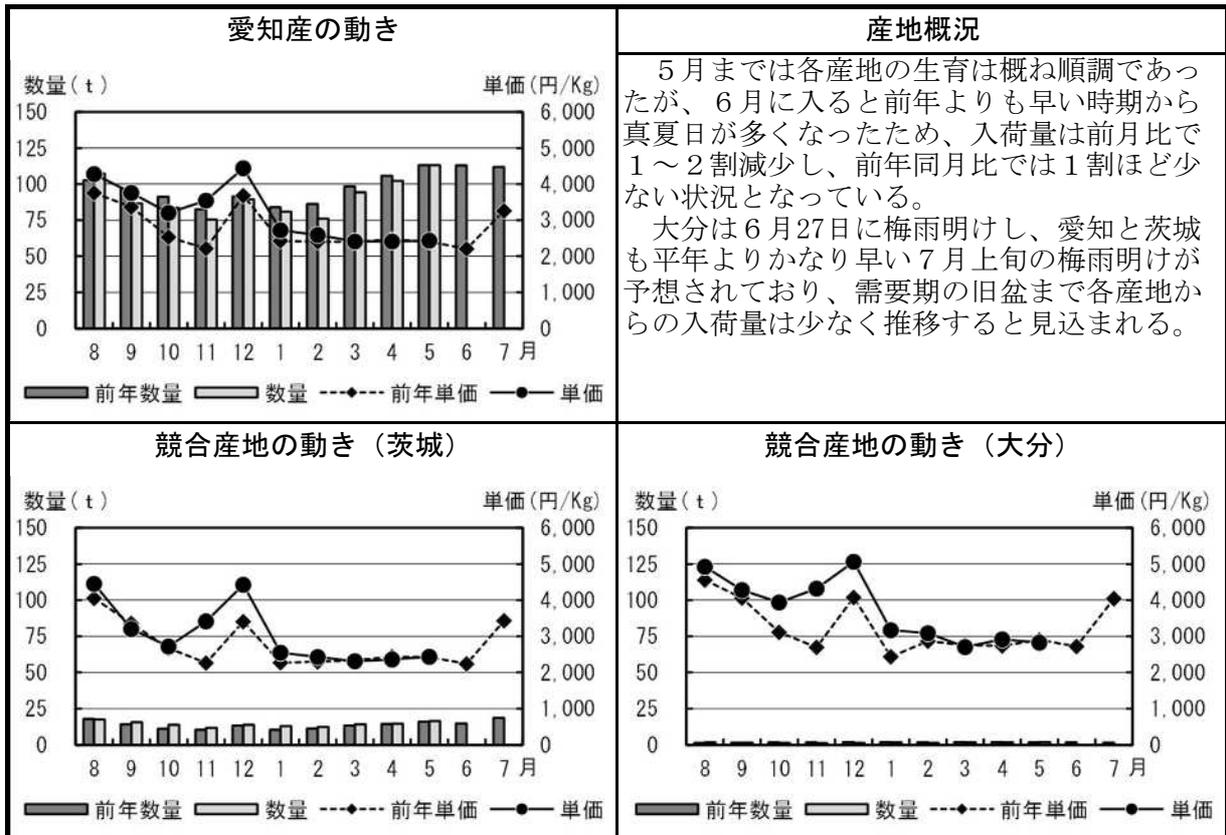
品目名 おおば

前年上位3産地 (%)

愛知 84%

茨城 14%

大分 1%



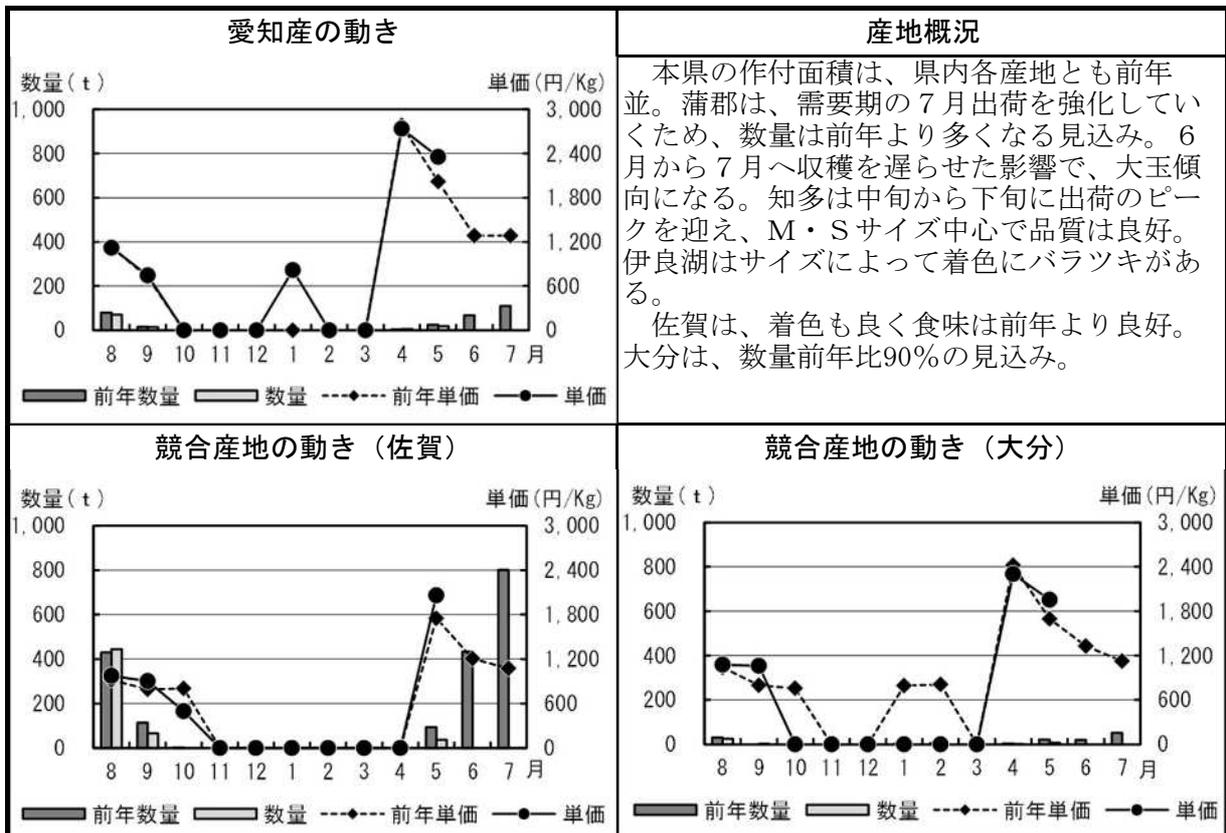
品目名 ハウスみかん

前年上位3産地 (%)

佐賀 78%

愛知 12%

大分 4%



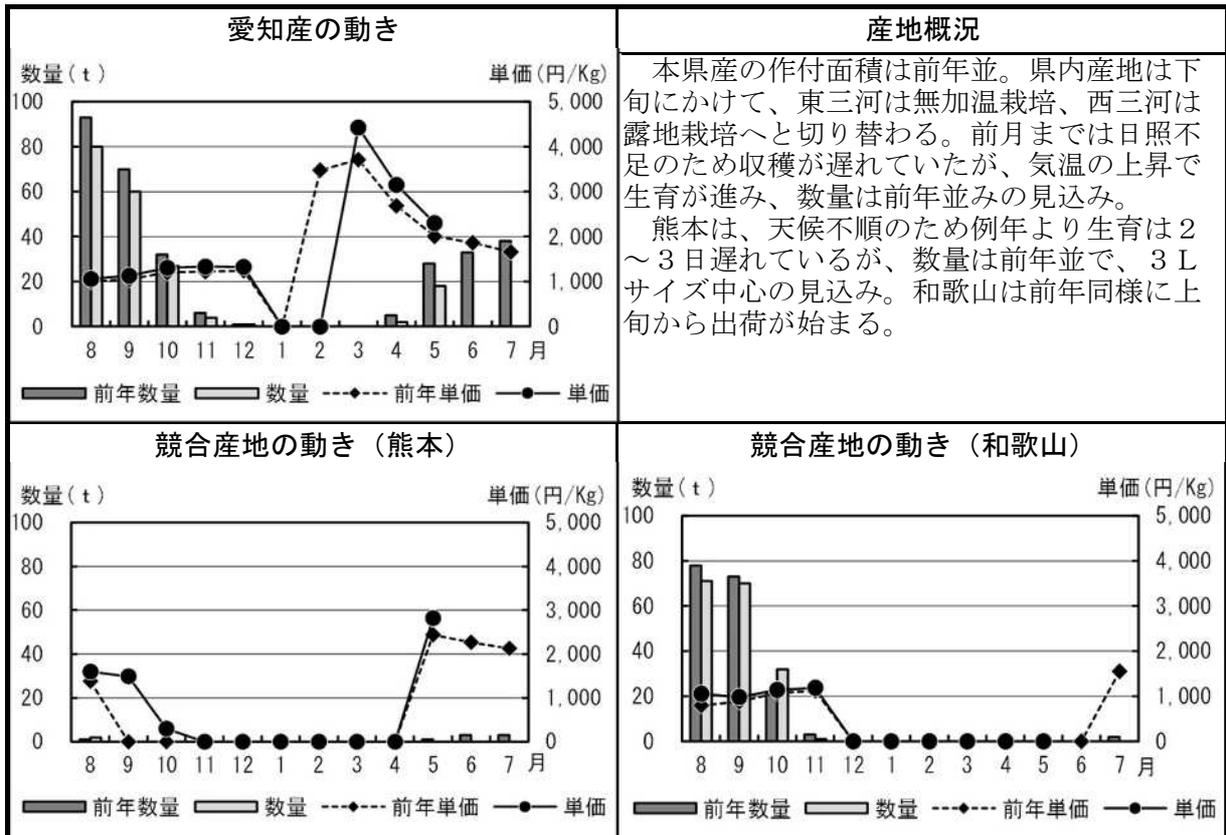
品目名 いちじく

前年上位3産地 (%)

愛知 79%

熊本 7%

和歌山 4%



切花・鉢花の7月の見通し

切花（愛知名港花き地方卸売市場 7月1日現在）

単位：千本、円／本

品目	区分		入荷量	卸売価格	前年及び本年の入荷量・価格の動き
	実績等				
輪 ぎ	実績	2020年	1, 7 4 9	4 5	
		2021年	1, 5 9 7	3 5	
		2022年	1, 2 5 3	4 4	
		2023年	1, 2 3 8	6 1	
		2024年	1, 2 5 3	4 4	
	5カ年平均	1, 4 1 8	4 5		
2025年見通し	1, 2 5 0	4 5			
概要	愛知、長野、三重から入荷。上旬は新盆需要に期待。中旬は入荷量も落ち着いて、下旬からは旧盆に向けて数量も増え、引き合いも少しづつ強くなる見込み。				
小 ぎ	実績	2020年	1, 6 7 2	3 1	
		2021年	1, 4 6 7	2 4	
		2022年	1, 0 1 7	4 1	
		2023年	1, 3 0 9	3 8	
		2024年	1, 0 1 7	4 1	
	5カ年平均	1, 2 9 6	3 4		
2025年見通し	1, 0 0 0	4 0			
概要	愛知、長野、埼玉から入荷。上旬は新盆需要に期待。梅雨も明けて、高温期が長くなってくると生育抑制の影響等も見受けられると思われる。下旬からは旧盆需要の買いも始まるので動きも良くなるだろう。				
カー ネ ー シ ョ ン	実績	2020年	1, 0 0 5	4 5	
		2021年	9 7 6	4 0	
		2022年	9 7 1	3 4	
		2023年	1, 0 0 0	3 6	
		2024年	1, 1 3 3	5 0	
	5カ年平均	1, 0 1 7	4 1		
2025年見通し	1, 1 5 0	4 5			
概要	長野、輸入中心に入荷。前半に長野産のスタンダードの山があるが、それ以降は次第に落ち着く見込み。				
か す み	実績	2020年	1 0 6	9 5	
		2021年	1 1 5	8 5	
		2022年	1 4 0	8 8	
		2023年	1 4 9	8 5	
		2024年	1 8 4	8 3	
	5カ年平均	1 3 9	8 7		
2025年見通し	1 5 0	8 0			
概要	福島、長野からの入荷となる。上旬は据え置き株のピークとなる。遅れ気味で推移していたため、中旬まで数量はありそうな見込みで下旬には少し落ち着いていく。				

単位：千本、円／本

品目	区分		入荷量	卸売価格	前年及び本年の入荷量・価格の動き
	実績等				
ゆり	実績	2020年	302	152	
		2021年	277	148	
		2022年	265	161	
		2023年	273	146	
		2024年	243	171	
	5カ年平均		272	155	
	2025年見通し		240	160	
概要	<p>オリエンタルユリは新潟、北海道、埼玉、岐阜からの入荷。新潟産は八重も増やしており、入荷は多め。LAは埼玉、新潟からの入荷となり、例年並みとなりそう。鉄砲ユリは兵庫、長野、愛媛からの入荷となる。</p>				
洋らん	実績	2020年	235	100	
		2021年	214	106	
		2022年	195	153	
		2023年	172	148	
		2024年	197	153	
	5カ年平均		203	132	
	2025年見通し		200	150	
概要	<p>愛知、静岡、鹿児島産の国産に加え、輸入品が入荷する。オンシジウムは4L中心に徐々に減少する。デンファレはソニア中心の入荷で、徐々に減少。シンピジウムはニュージーランド産の入荷が見込めるが、為替の影響で入荷減となる見込み。カトリアは横ばいの見通しであるが、出荷者により谷間が発生し、日々増減がありそう。コショウランは白大輪系は微減となる見込み。</p>				
ばら	実績	2020年	585	54	
		2021年	557	51	
		2022年	644	51	
		2023年	683	52	
		2024年	675	52	
	5カ年平均		629	52	
	2025年見通し		680	52	
概要	<p>愛知、岐阜、三重、長野から入荷。6月の高温の影響で暑さのダメージが見受けられ、中旬以降株を休める品種も出てくる。全体的には前年並みの出荷予想。</p>				
枝もの	実績	2020年	1,490	58	
		2021年	1,366	64	
		2022年	1,482	71	
		2023年	1,359	75	
		2024年	1,428	72	
	5カ年平均		1,425	68	
	2025年見通し		1,400	70	
概要	<p>梅雨も明け、猛暑日が続く中、山取りの花材は減少していく。七夕に向け笹の入荷も始まり、新盆向けの法月、ハスなども入荷してくる。長野県中心に草花等が増え、枝物の品種・品目は少なめになる予定。</p>				

品目	区分		入荷量	卸売価格	前年及び本年の入荷量・価格の動き
	実績等				
アンズリウム	実績	2020年	25,748	1,020	
		2021年	23,394	992	
		2022年	21,480	1,095	
		2023年	23,404	989	
		2024年	25,845	999	
	5カ年平均		23,974	1,017	
	2025年見通し		25,000	1,000	
概要	<p>入荷量は前年よりやや減少か。海外からの苗の仕入れ単価も年々上昇している為、今後生産量が増える事はない見込み。出荷は、4～6号が中心で、8号から尺までの相場が厳しいと思われる。グリーン系の色の生産が少なく売れ行きはいいと思われるが、赤が特に厳しい見込み。</p> <p>前年7月の主要県の入荷実績は、金額ベースのシェアで1位愛知(83.6%)、2位長崎(8.8%)、3位千葉(2.1%)となっている。</p>				
ファレノ	実績	2020年	29,373	3,215	
		2021年	31,387	3,439	
		2022年	22,489	3,554	
		2023年	26,588	3,534	
		2024年	24,001	3,835	
	5カ年平均		26,768	3,499	
	2025年見通し		23,500	3,830	
概要	<p>入荷量は前年より減少か。大輪、ミディー共に生産コストが上がり、単価が伸び悩んでいるので7月のお中元シーズンでも近年販売が苦戦。</p> <p>前年7月の主要県の入荷実績は、金額ベースで1位愛知(61.7%)、2位静岡(9.8%)、3位宮崎(4.8%)となっている。</p>				
バラ及びミニバラ	実績	2020年	13,446	121	
		2021年	13,715	103	
		2022年	5,142	72	
		2023年	9,650	93	
		2024年	7,921	104	
	5カ年平均		9,975	103	
	2025年見通し		7,500	100	
概要	<p>入荷量は前年よりわずかに減少か。入荷の中心は3～4号の小鉢が中心になるが、酷暑の影響が大きく、生産量は減少傾向。気温の上昇に伴う花持ち、温度によるムレなどが懸念され、単価は厳しくなる見込み。</p> <p>前年7月主要県の入荷実績は、金額ベースのシェアで1位愛媛(51.2%)、2位茨城(26.0%)、3位岐阜(13.3%)となっている。</p>				

単位：鉢、円／鉢

品目	区分		入荷量	卸売価格	前年及び本年の入荷量・価格の動き
	実績等				
オンシウ	実績	2020年	1,078	701	
		2021年	1,113	412	
		2022年	711	414	
		2023年	711	561	
		2024年	483	529	
	5カ年平均		819	528	
	2025年見通し		400	500	
概要	<p>入荷量は前年より減少か。生産コスト、資材の高騰に伴い、生産原価と販売単価が見合わない状況。また洋ランギフトが多品目に押され単価が伸び悩んでいる。ギフト商品として市場出荷される量は、かなり少ないとの見込み。 前年7月の主要県の入荷実績は、金額ベースのシェアで1位愛知(69.5%)、2位高知(30.5%)となっている。</p>				
スパテイ	実績	2020年	6,083	314	
		2021年	7,104	314	
		2022年	2,942	471	
		2023年	4,826	357	
		2024年	7,675	243	
	5カ年平均		5,726	318	
	2025年見通し		5,000	320	
概要	<p>入荷量は平年よりかなり減少か。生産量減少が要因で平年より少ない見込み。4～6号の出荷の中心になる為、平均単価は入荷量の減少に伴い前年よりは高い水準で移行する見通し。 前年7月の主要県の入荷実績は、金額ベースのシェアで1位愛知(42.3%)、2位三重(37.9%)、3位岐阜(17.6%)となっている。</p>				
ドラセナ	実績	2020年	20,018	872	
		2021年	19,934	1,127	
		2022年	16,485	1,214	
		2023年	17,273	977	
		2024年	14,659	1,072	
	5カ年平均		17,674	1,047	
	2025年見通し		14,000	1,000	
概要	<p>入荷量は前年からやや少なめの予想。近年は、種苗会社からコンシンネの苗の導入があり、4号～6号のサイズでの出荷が増えてくる可能性がある。輸入原木に関しては、仕入れ単価が上昇することで原木の仕入れが減っている為、原木出荷は減少する見込み。 前年7月の主要県の入荷実績は、金額ベースのシェアで1位愛知(55.5%)、2位鹿児島(18.8%)、3位三重(7.7%)となっている。</p>				



いいともあいち運動って知ってる??

- 県内の消費者と生産者が今まで以上にいい友関係になる
- Eat more Aichi products (イート モア アイチ プロダクツ)

＝もっと愛知県産品を食べよう（利用しよう）

愛知県の農林水産業の振興や農山漁村の活性化を通じて県民全体の暮らしの向上を図るため、県民の方々に「愛知県農林水産業の応援団」になってもらい、消費者と生産者が一緒になって愛知県の農林水産業を支えているという「運動」です。

県民の方々に愛知県産農林水産物をもっと利用していただきたいという、「愛知県版地産地消の取組」でもあります。

あいち農産物生産流通レポート No.624
2025年6月発行
農業水産局農政部食育消費流通課
〒460-8501
名古屋市中区三の丸三丁目1番2号
電話 (052) 954-6434